



| | |
|--------------|---|
| Title | 現代中国語指示詞“这”と“那”の前方指示用法における選択基準 |
| Author(s) | 小野, 絵理 |
| Citation | 大阪大学, 2016, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/55712 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (小野 絵理)

論文題名

現代中国語指示詞“这”と“那”の前方指示用法における選択基準

論文内容の要旨

本研究の目的は、指示詞の用法のうち、指示する対象が前方の言語的文脈に義務的に現れる前方指示用法に基づき、中国語の指示詞“这”と“那”の選択基準を示すことである。また、前方指示用法における指示詞選択について詳細な分析を行った上で、文脈指示用法における指示詞選択の全体像を明らかにすると共に、文脈指示用法と非文脈指示用法における指示詞選択の関係を示すことも目的としている。

中国語の指示詞選択に関する先行研究では、呂叔湘 1985 が、“这”と“那”の対立を「近」と「遠」の対立であるとし、空間的な遠近を基本としながらも、しばしば心理的な距離によっても区別されることを指摘した。しかし、その心理的距離について、具体的にはどのような場合に「近い/遠い」と感じられるのかについては検討されておらず、語用論的分析もなされていない。現場指示用法を中心とした、非文脈指示用法における指示詞選択を扱った代表的な研究としては木村英樹 2012 があるが、そこでは文脈指示用法における指示詞選択の分析はなされていない。文脈指示用法における指示詞選択に関与し得る具体的な要素を扱った研究には、丁启阵 2003、陈艳芳 2005、杨玉玲 2010 などがあるが、どれも複数の要素が競合したときにどうなるのかについては全く、あるいはほとんど触れられていない。また、それらの研究では文脈指示のうちの一部の用法、あるいは一つから数個のごく限られた基準についてのみを考察しており、文脈指示用法における指示詞選択の全体像を示すには至っていない。

それに対し、本論文は、談話において相手の発言を指示する場合と、文章を含む自分の発言を指示する場合の両方を研究対象としているという点で、これまでであった文脈指示用法の研究の中でも特に広い範囲を扱っている。また、これまでの先行研究と特に異なっているのは、単に選択基準を主張して終わるのではなく、基準間の優先度を検討することで、文脈指示用法における選択基準はどのような体系を構成しているのか、その全体像を示したことである。それに加え、中国語の文脈指示用法における指示詞選択が、同言語の現場指示における指示詞選択とどう関係しているのかについても考察した。

本論文は全 7 章から構成されている。

第 1 章では、研究対象と研究目的を述べた。それから指示詞に関して全体的に概観するため、指示詞について、また現場指示、観念指示、文脈指示がそれぞれどのような用法であるのかについての概要を示し、本論文の基本的な立場を示した。次いで、研究方法、本論文で用いる用語、本論文の構成について述べた。

第 2 章では、中国語の指示詞選択に関する先行研究を挙げた。まず、指示詞の全用法における根本的な機能について述べた先行研究を紹介し、次いで、現場指示用法における指示詞の使い分け、観念指示用法において使用される指示詞について述べた。それから、文脈指示用法で既に指摘されてきた、指示対象と指示詞の距離、時間的要素、指示対象の発言者、話者の感情・態度、肯定/否定、接続機能の有無、前方指示/後方指示、話題/非話題といった要素がどのようなものであるのかについて、典型例を挙げつつ解説し、これらの基準がどのようにして妥当、あるいは妥当でないかと判断されたのかその経緯を述べた。そして、これまでに検討してきた基準のみからでは説明のできないどのような問題がまだ残っているのかについて述べ、本論文で扱う言語現象を指定し、そのように指定した理由を述べた。

第 3 章では、相手の発言を指示する場合における指示詞の選択基準を考察した。そして、次のような基準を提案し、その妥当性を検証した。

話者が相手の発言内容を重視している程度が相手と同じほどかそれ以上に高いことを示す場合、また話者が自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合には“这”を用い、逆に話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきりと示す場合には“那”を用いて指す。

そして、この基準が現場指示における指示詞選択とどのように関わっているのかを考察した。

第 4 章では、自分の発言を単独の指示詞で指示する場合について次のような指示詞の選択基準を提案し、その妥当性を検証した。

受信者が指示対象に対して抱く理解・期待・疑問などを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。そのような想定を明示的に表現する意図なく指示する場合には“这”を用いる。

そして、上の選択基準がなぜ先行研究よりも優れていると言えるのか、また、相手の発言内容を指示する場合の選択基準とどのように関連しているのかを考察した。更に、この基準が現場指示における指示詞の選択基準とどのように関わっているのかを考察した。

第5章では<代名詞+指示詞+量詞+“人”>という形式において、主に代名詞と後方の成分が同格関係にある場合の指示詞選択を分析した。

先行研究ではこの形式において代名詞が一人称と二人称の場合には“这”のみしか用いられないとされているが、実際には代名詞が複数の場合には“那”が使用されることがある。なぜ複数の場合には“那”が使用されることがあるのか、どのような場合に使用されるのかを扱った研究は管見の限り無い。本論文はこの問題に答えを出し、たとえば、“你们这些人”と“你们那些人”はそれぞれ用い得る言語環境にどのような違いがあるのかを明らかにした。

この形式において、代名詞が三人称の場合の指示詞選択については、管見の限り、楊玉玲 2010 が非断定的な形で“他/他们”に対する肯定・中立・否定的態度という要素を指摘しているのみである(楊玉玲 2010 : 145)。しかし、実際にはその要素のみからは説明のできない指示詞の選択現象が多く存在する。本論文は、現場的要素、文脈的要素、観念的要素の全ての側面を考慮した上で、選択基準を設定するのに関与的な言語環境にはどのようなものがあるのかを検討し、楊玉玲 2010 の指摘した要素のみからは説明できない指示詞選択現象が生じる理由を明らかにし、中国語話者によって異なる意見が生じる場合がある理由を考察した。

第6章では、まず第3章と第4章における研究成果によって新たに得られた指示詞の選択基準と、主に第2章で既に述べられていた選択基準が関わり合い、かつそれぞれの基準が主張する指示詞が対立するときには、どの基準がより高い優先度をもって指示詞の選択が行われているのかについて調べ、得られた結果を二分法で示して図にまとめた。

更に、第5章で得た研究成果を通して、純然たる文脈指示用法における指示詞選択と、他の用法の指示が可能な状況における文脈的指示とでは、指示詞の選択にどのような違いがあるのかを考察した。純然たる文脈指示用法の場合には、非常に多くの要素が関わって指示詞は選択されてきた。ところが、ひとたび文脈的・現場的・観念的指示が共に可能な状況が生じると、どの用法を採用して対象を指示するのかが重要になり、採用する用法が決定した後の指示詞の選択は非常に単純化されるという特徴を指摘した。また、全ての用法を検討することを通して、中国語の指示詞には、本質的に次のような特徴があることを指摘した。指示詞の最重要機能は受信者を対象へと確実に導くことである。この点で指示詞が不可欠な役割を果たしている場合、たとえば指示対象の候補となり得るものが複数あり、受信者は指示詞を頼りにしなければ対象をはっきりと識別できないとき、指示詞の使い分けは、物理的な遠近に近い、より初歩的な意味を示し分ける。一方、言語環境によって、指示対象が明白で、受信者を指示対象へと間違いなく導くという面での指示詞の負担が少なくなるにつれて、指示詞の使い分けは指示対象に対する付加的な情報、すなわち指示対象に対する話者の見方や関係性といった、より高度な意味を示し分けるものへと機能を変化させる。

第7章では、本論文の研究成果と意義、及び今後の課題について述べた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏 名 (小 野 絵 理) | | |
|-----------------|-------|--------------------|
| | (職) | 氏 名 |
| 論文審査担当者 | 主 査 | 言語文化研究科教授 杉 村 博 文 |
| | 副 査 | 言語文化研究科教授 古 川 裕 |
| | 副 査 | 言語文化研究科准教授 林 初 梅 |
| | 副 査 | 言語文化研究科特任准教授 金 昌 吉 |
| | 副 査 | 言語文化研究科特任准教授 張 恒 悦 |

論文審査結果の要旨

本論文は、現代中国語の指示詞“这”（近称）と“那”（遠称）の前方指示用法における選択基準を体系化したものである。テーマ自体に新規性はないが、できあがった論考は極めて新規性に富むものとなっている。

“这”と“那”の前方指示用法を体系的に論じるには、以下のような作業が必要になる。

（一）“这”と“那”の選択に分歧が生じる先行文脈を網羅する。

（二）個々の文脈に応じて、“这”と“那”の選択に関与する基準を網羅する。

（三）個々の基準が属するレベルを確定する。

（四）同一レベルに複数の基準が存在する場合、どの基準がどの基準に優先するかを確定する。

本論文は、以上の作業を注意深く、周到にやり遂げ、最終的に“这”と“那”の二項対立を反映したフローチャート（複数）としてまとめ上げた。また、文脈指示用法に関して得られた結論が、現場指示における“这”と“那”の用法とどのように対応するかについても考察を加えている。

本論文が抽出した選択基準は、この領域に馴染んだ者にとって意表を突くものを多く含み、その妥当性はなお今後の検証に委ねなければならないが、今後この分野における研究を大いに活性化させることが期待できる。

本論文は、考察対象から“这”と“那”の文脈指示以外の用法を除外している。そのため、文法化の進んだ接続詞的用法や副詞的用法に言及がなく、博士論文として小さくなりすぎているという批判が予想されるが、文法化の進んだものは、その反面として、分布やシンタクスに固定化が見られるため、“这”と“那”の選択基準は却って単純であり、本論文で得られた結論から容易に導き出すことができる。

本論文は、字面上厳密に書こうとする意識が災いし、文章が却って晦渋になっている箇所が少なからず見受けられるが、全体の価値を損なうには至らないと判断される。

上記の評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号（言語文化学）を授与するに相応しい業績であると判定した。